JTU-HYOGO
兵庫高等学校教職員組合
日本教職員組合（日教組）

兵高教新聞

裏面 ◇第33次教育研究集会
分科会の概要

神戸市中央区中山手通4-10-5　神戸市教育会館内　TEL078-261-0829 FAX078-261-1094 E-mail:hyokokyo@pearl.ocn.ne.jp　　発行人：西村恭介　編集：兵高教書記局

兵高教第33次教育研究集会開催

＝「民主社会を支える教育」～子どもたちの最善の利益のために～＝

10月15日（土）、神戸市教育会館において、兵高教第33次教育研究集会を開催しました。県下各地から多くの参加者を集め、午前中の全体会、午後の分科会を通じて、活発な討議・意見交流が行われました。

冒頭、西村恭介執行委員長はあいさつの中で、新型コロナウイルス感染症の影響が長期化する中で日々奮闘している教職員に感謝の気持ちを表した上で、ロシアのウクライナ侵攻にも触れながら世界情勢に言及し、犠牲となるのはいつも子どもたちや社会的弱者であること、戦争は最大の人権侵害であること、どんな理由があっても戦争は絶対に引き起こしてはならないことをあらためて強く訴えました。また、不安定な世界情勢の影響と政府の無策により市民の日常生活は厳しさを増し、子どもたちの学びはもとより日々の暮らしさえ脅かされている現状に対し、私たち教職員がどう立ち向かっていくか、本教研集会を通じてともに学び、考え、とりくみを進めていこうと呼びかけました。

主催者あいさつ

■記念講演
「子どもの貧困
～思春期をサポートする困難さについて～」
徳丸ゆき子さん（認定ＮＰＯ法人ＣＰＡＯ）

何をおいても優先すべきは子どもの「命」であり、「今を生きるためのサポート」「子どものニーズに応えるために親丸ごとサポート」することを大切に、最前線で奮闘されている徳丸ゆき子さんから、子どもたちの置かれているリアルな現状と、その過酷な状況にどう向き合い、何ができるかを語っていただきました。

講演の概要を簡単に紹介します。

・コロナ禍の前から、世帯の２割弱、ひとり親世帯の35％に「食料を買えない」経験がある。

・「子どもの貧困」は子どもたちから、夢や希望を奪っていく。経済的、時間的に余裕のないストレスを抱えた保護者は、子どもへの暴力・虐待へとつながってしまうことも少なくない。

「こどもの貧困」は発達の諸段階において、さまざまな機会を奪い、その結果として人生全体に影響をもたらすほどの深刻な不利を負ってしまう。「経済的困難→子ども・若者の貧困→おとなの貧困→次世代の子どもの貧困」という負の連鎖を断ち切らなければならない。

・ＣＰＡＯは、「まずはごはん！」＝食を通して子どもたちとつながり、親子の生活を丸ごとサポートすることで抱えている問題を共に乗り越え、子どもたちの生活に一歩踏み込んだ暮らしのサポートをしている。

・子どもの権利はすぐに奪われる。２０２０年の「コロナ休校」は子どもたちの命に係わる問題であった。コロナ禍で長期休業や外出自粛により家族で過ごす時間が増えた影響で、居場所がなくなる子どもたちが大幅に増えた。２０２０年の小中高生の自死は４９９人（前年比１００人増）で１９８０年以来最多となった。その他、ＣＰＡＯでも子ども・若者の家出相談、サポート依頼が激増した。居場所のない子たちは保護者と家にいるよりも、犯罪被害・加害に巻き込まれる危険性の高い「グリ下」「トー横」など繁華街を逃げ場に選んで集まっていく。

・家庭や学校で問題を抱え孤立している子たちがゆるく集まれる場所がない。地域社会がたむろする子たちを排除している（公園等のモスキート音、コンビニ前や公園に集まっているとすぐに通報される、など）。

・居場所のない子たちがスマホ・ＳＮＳで繋がり、情報を得る。しかし、そこには搾取する大人も存在している。

・「グリ下」「トー横」に集まる子たちについてマスコミ報道が増えてきた。そうすると「なぜ行政は何もしないのか」という世間の圧力が強まり、一斉補導が強化される。行き場のない子どもたちは一時保護施設へ入ることになるが、児童相談所から受け入れを拒否されることが増えている。

・これまで女子のシェルター・シェアハウス等はあったが、15～18歳の男子が一番制度の支援が手薄。そこで、今年４月から「10代向け男子のシェアハウス」を大阪ミナミにオープンした（ただし、未成年者なので利用には保護者の同意が必要）。そこで実感したのが、彼らの生活力のなさ。ごはんが炊けない、スーパーに食料品を買いに行っても、何を買っていいかわからない。スマホは持っていても、バイト探しのためにどう検索すればよいのかわからない。生活訓練が必要であるが、施設では何も教えてくれない。

・日本の社会の中では、人間らしく生きていくのも「親」しだい。親権が強すぎ、保護者が酷い場合には助けられない。ＮＰＯが保護しようとしても、「略取」「誘拐」と訴えられるリスクが大きい。少子化が進行し、子どもの数が少ないのになぜ大人たちが関われないのか。法律・制度上の課題も多い。

・家庭や学校で問題を抱える子たちへの、「家か施設か」「学校か退学か」の二択ではない、オルタナティブな保護・教育の場、さらに「幼少期から親子丸ごとの手厚いサポート」が必要。

・学校は、「居場所としての機能」をもち、「ほっとできる」場所であってもらいたい。特に高校は最後の砦であり、学校に来てくれて「よかった」「ありがとう」と思ってほしい。良かれと思って言うことが、子どもたちを追い詰める場合もある。信頼関係ができているか。実は子どもたちは話を聞いてほしいと思っている。

※分科会の概要は裏面に掲載しています。

記念講演・徳丸ゆき子さん

全体会の様子

兵庫高等学校教職員組合（兵高教）は、《JTU 日教組》加盟の組合で、1989年に設立しました。
※「兵庫高教組」「兵高教組」「高教組」（兵庫県高等学校教職員組合）とは、関係ありません。

■分科会報告■

第1分科会「今日の教育課題」

①「生徒が主体的にとりくむ部活動」
岩井誠さん（阪神・武庫荘総合分会）

◆現任校に赴任し、未経験のバドミントン部顧問を担当。新型コロナウイルス感染症の影響で学校は臨時休業を余儀なくされ、高校総体は中止となる中、新チームがスタートした。前任の顧問はバドミントン経験者で、練習メニュー・スケジュール管理・技術指導の全てを顧問主導で行っていた。

新チームの男女の主将に、「今後は自分たちでメニューを組み、自分たちで部活動を運営すること。練習メニューには口出しはしない。スケジュールや練習試合などを組むときは必ず部員に了承を得る。練習時間については、平日は1日休みで全体練習は2時間程度、土日は1日休みで全体練習は3時間程度、早朝練習はしない」ことを告げ、1時間程度話し合い、納得してもらった。

◆顧問として大切にしていること

・部員との信頼関係

部員の希望はなるべく実現できるよう努力する。実現できない場合は、その理由を説明する。

・のびのび活動できる環境づくり

全体練習の時間の厳守、理不尽な指導をしない、自主練習の重視、早めのスケジュールを提示、備品などの迅速な供給、全力を尽くした部員に対する称賛など。決して顧問は勝つことにこだわらない姿勢をもつ。

・現在の活動状況

男女の主将を中心に自分たちで練習メニューを決定、2年生が1年生に、経験者が未経験者に技術指導をする、部員の要望で外部コーチ（3年生男子部員が所属するクラブチームのコーチ）を招き、公式戦でベンチコーチを依頼、学業優先、団体戦のチーム編成は自分たちで決定する、など。

◆部員に余裕をもたせ、安心感を与えることこそが顧問の役割ではないか。多様な子どもたちが高校に入学してくる今日、部活動顧問の指導法も時代の変化に合わせて変えていく必要がある。

②「高校通級の現状と課題　その後」
船脇吉広さん（丹有・高等特別支援分会）

◆拠点校の抱える課題を共有するため、特別支援教育課が研修を行っているが、内容のさらなる充実が必要。

◆高校教員と特別支援学校教員の人事交流を増やせば、適正な人員配置ができる。

◆通級指導が校内で教員に見えておらず、専任の教員の「立場が低下」していく。職員会議等で報告、通級担当者の学年会議への参加等を行い、通級指導の校内での周知を図る必要がある。

◆若い教員は大学でインクルーシブ教育について学んでいる。その層と、ベテラン層で受け止め方に違いがある。例えば、ベテラン層は合理的配慮を「不公平」だという。

◆担任がソーシャル・スキル・トレーニングの必要性を感じても、生徒本人・保護者の了解が得られない場合がある。

③「人権教育の観点からの進路保障のあり方
～進路保障はルーツ・特性などの掌握理解から～」
吉水公一さん（阪神・西宮今津分会）

◆西宮今津高校の人権教育のとりくみを紹介したのち、「進路保障」についてワークショップ形式で学習した。ワークショップでは、就職試験の際のかつての社用紙と統一応募用紙の比較と問題点の指摘・確認、面接での15の質問項目の適否とその理由について、参加者で考え、協議した。その上で、「生きていくための、『進路保障』のための力（学力）とはどんな力（学力）なのか。学校などでどんな学力を子どもたちにつけさせたいのか？」について議論を深めた。

第2分科会：「日々の授業づくり」

①「配慮を要する生徒が在籍する学級における
歴史授業の進め方と評価の工夫
～インクルーシブ教育の視点を用いて～」
阪本真人さん（阪神・西宮甲山分会）

◆生徒たちは、明るく教員との距離も近い。一方で、定員割れが続いており、中学校時代は学校に登校しにくく欠席が多かった生徒、学習面で困難さを抱えている生徒など、さまざまな配慮を要する生徒が少なくない。

◆授業開始前にグループになっておき、アイスブレークから授業を始める。そのあと、グループごとに教科書の音読リレーを行うが、ずっと座っているのがしんどい子もいるので、この時は立って読み進める。漢字が読めない場合は周囲で教えあう。

◆次に、教員の指示によって教科書のキーワードにマーカーを引いていく。聴いているだけではなく、生徒自身の「動き」を加える。

◆その後、KP法（紙芝居プレゼンテーション法）を用いて、10分間だけ教員の説明の時間を設ける。「聴くこと」が重要であり、座席は自由。床に座っていてもいい。KP法ではボードをずっと残しておけるので、いつでも確認できる。

◆続いて、ワークシートへキーワードを記入していく。10分間でグループで協力して完成させる。完成したら「やってみよう」に進み、史料を読み解く課題にチャレンジし、できたら他の班の意見を聞きに行き記録する。何が正解か、ではなく、自分が納得した答えを見つけるようにする。

◆考査では、従来型の知識を問う問題に加え、授業中に史料をもとに考えた部分について出題する。

◆支援を要する生徒を使う。集中力がなく立ち歩く生徒がいれば、「みんなも他のグループの意見を聞きに行こう」、何でも思ったことを口に出してしまう生徒がいれば、その発言を拾って他の生徒に発問する。

◆ずっと絵を描いている生徒は、絵を描くことで落ち着こうとしている。辞めさせようとするとパニックになるので、落ち着くまで待って対応する。同世代のなかまと話せない自閉傾向の生徒の場合は、グループに教員が混って進める。

②「自ら問いを立て、
自ら課題を解決していく授業をめざして」
中野雅志さん（西播・県立大附属分会）

◆「なぜ？」や「なに？」という疑問が生まれるような資料発掘をするため、授業で使えそうなものはないか、普段から意識し探している。生徒自らが感じた疑問を解決していけるような問いを用意し、その問いを解決していく中で学びを深めていくことをめざし、試行錯誤を繰り返している。

◆生徒たちが自由に発言できる雰囲気づくりを重視し、できるだけ生徒の発言を大切にしたい

◆最初の授業で資料を使って、歴史を学ぶ意味をみんなで考えた上で、「細かな事柄を覚えることが大切なのではなく、世界の見取り図をわかることを意識してほしい」「歴史総合の教科書どおりにやろうとするのには無理がある」ことを理解してもらおうと努めた。

◆教員自身が「アクティブ・ラーナー」になることが大切。「教室に一日いて、評議よく本を広げて丸暗記する」ことは勉強ではない。

◆内容の精選がカギになる。また、割り切って講義形式で進め、知識を定着させるかたちの授業もやっていかなければならない場合もある。

◆批判的に歴史を検討し考察することが大切。様々な考えや価値観を持つなかまと共通の学習課題について話し合い、自らの見方・考え方を広げ、時には意見対立しながら関りを通して課題を追求して解決していくことこそが、学校で学ぶことの意義ではないか。

③「平和学習へのとりくみ
～沖縄から平和・基地問題を考える～」
西村恭介さん（本部）

◆沖縄返還から50年の節目の今年、3年ぶりに「沖縄平和行進」が実施された。6月に「沖縄から平和を考える」と題して青年部学習会を行い、沖縄平和行進の参加報告を行うとともに、参加者で平和学習の教材づくりにとりくんだ。

◆沖縄出身のラッパー／歌手であるＡｗｉｃｈが、今年の年5月15日にリリースした「ＴＳＵＢＡＳＡ」のＭＶを素材とした教材を作成し、学校の実態に合わせてアレンジし、実際に授業を実施。

◆多くの生徒がアメリカ軍の沖縄支配からの本土復帰を風化させないための作品であると理解していた。加えて、「沖縄の人が前向きに生きていくため」といった意見も散見された。生徒たちは本時の「平和学習」が、今を生きる私たちが前向きに生きていくための手立てであることに気づいたのかもしれない。また、「平和」について改めて考えた生徒が多かった。中には「安全保障とは何か」「米軍基地がそもそもなぜ沖縄に設置されているのか」等、踏み込んだ疑問を挙げた生徒もいた。

分科会の様子

兵高教は教職員の自主的な研修・多彩な学習の場を用意しています。積極的なご参加を！